

令和8年度 世羅町立世羅小学校教育研究計画

I. 研究主題

「根拠を基に、自分の言葉で表現できる児童の育成」

～数学的な見方・考え方を働かせる『問い・見通し・まとめ』の充実を通して～

II. 主題設定の理由

1. 成果と課題（これまでの歩み）

令和7年度の研究では、「世羅小授業モデル」に基づく「練り合い」を軸に、児童の主体的な学びと基礎学力の向上（標準学力調査の結果等）に一定の成果が見られた。

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
学年平均点(全国平均)	80.8(78.6)	84.3(71.3)	72.7(72.7)	84.6(65.7)	70.5(62.0)	83.8(73.1)

表1 「標準学力調査」（令和8年1月実施）結果

しかし、事後アンケートや授業観察からは、以下の課題が浮き彫りとなった。

- ・自分の考えを「自分の言葉」で書こうとするが、算数的な根拠（図・式・用語）が不足している。また、計算手続きを経て数値を導き出すことはできるが、その結果を比較の指標として活用し、「～という結果から、〇〇の方が大きいと言える」といった根拠に基づく推論を行う力が不足している。このため、数値を求めることのみで終始し、数学的な言葉を用いて結論の妥当性を説明する活動に抵抗感を示す児童が多い。
- ・授業の「めあて（問い）」に対し、「まとめ（答え）」が論理的に正対していないケースが見られる。

2. 算数科の本質

学習指導要領で示される「数学的な見方・考え方」を働かせることは、単なる知識の習得ではなく、未知の課題を論理的に解決する力そのものである。今年度は、これまでの「主体的な表現」を一步進め、「論理的・数学的な妥当性」を備えた表現へと質的に高める必要がある。

3. 本主題に込めた願い

児童が「問い」に対し、見通しをもって解決し、そのプロセスを数学的な言葉で「まとめ」として結晶化させる。この一連の構造を児童自身が自覚することで、他教科や日常生活でも活用できる「論理的思考の土台」を築きたいと考える。

III. 研究仮説

「問い」に対し、子供たちが「数学的な見方・考え方」を働かせて、自ら「まとめ」を創り出す活動を取り入れれば、根拠をもとに自分の言葉で表現する児童が育成できるであろう。

IV. 研究の具体的な手立て

1. 「算数科世羅小授業モデル」の質的改善（授業の構造化）

授業モデルの4ステップを、特に「出口（まとめ）」の質に焦点を当てて再構築する。

- ① 課題把握（問い）：既習との「ズレ」から、児童自身が解決したくなる「問い」を引き出し、その時間の「めあて」へと昇華させる。
- ② 自力解決（見通し）：解決の根拠となる図・式・言葉を選び、自分の考えを構築する。
- ③ 思考表現（練り合い）：友達の考えと比較し、「はかせどこ（速い・簡単・正確・どんなときも・こんなときは）」の視点でより良い表現を吟味する。
- ④ 振り返り（まとめ・再形成）：練り合った内容から共通する「きまり」を見出し、めあてに対する答えとして「一般化」する。教師がまとめを提示するのではなく、児童の言葉を比較・吟味し、クラス共通の「公式まとめ」を創り出す。また、児童の「まとめ」が数学的な本質から逸脱（単なる感想や個別解決に留まる）した際は、教師が正解を提示するのではなく、以下の問いかけで「一般化」へ導く。

「まとめ」においては、児童が以下の3点を判断基準（ものさし）として他者の記述を吟味する。

- ① 正対：めあての「問い」に対応した「答え」になっているか。
- ② 根拠：算数用語や図・式を用いて、妥当性が説明されているか。
- ③ 一般化：「はかせどこ」の「ど」を意識し、汎用性のある「きまり」になっているか。

教師は、これらの基準を満たす児童の言葉を「価値づけ」し、クラス全体の「公式まとめ」へと繋げる。

2. 「まとめ」と「振り返り」の段階的指導（スモールステップ）

「どう書けばいいかわからない」を解消し、児童が「数学的な見方・考え方」を働かせて書けるよう、以下の足場かけを行う。

- ・視点カードの活用：「やり方（手順）」「きまり（性質）」「よさ（簡潔性など）」の3つの視点から、その時間の問いに適した視点を選んで記述させる。
- ・文末テンプレートの掲示：「～なので、～といえる」「～の時でも、いつも～になる」等の型を常時掲示し、論理的な記述を支える。
- ・キーワードの明示：その時間の「見方・考え方」を働かせる鍵となる算数用語を黒板に明示し、活用を促す。

3. 児童が「問い」を解決する「まとめ」の創造的構築

本研究では、従来の「教師が提示するまとめ」から脱却し、世羅小授業モデルの「再形成」において、児童が自ら「まとめ」を創り出す過程を重視する。

具体的には、練り合い後に「仮のまとめ」を書く時間を確保し、児童の言葉同士を比較・吟味させる活動を取り入れる。これにより、個別の問題解決を「一般化（きまりの発見）」へと高めるプロセスを児童自身が経験し、算数的な用語を用いた論理的な表現力を育成していく。

ここにおいて教師は、安易に「まとめ」を提示する存在ではなく、児童の言葉を「引き出し、比較させ、統合する」ファシリテーターに徹するものとする。こうした一連の活動を通して、児童は

「めあて（問い）」に対し、自らの力で根拠ある「答え（まとめ）」を構築する達成感を味わうとともに、数学的な見方・考え方を自覚的に働かせるようになると考える。

4. 「学びタイム」による習熟の保障

基礎的な知識・技能や授業で身に付けた「見方・考え方」を確実に定着させるため、清掃後の帯時間を活用する。

- ・内容：教科書準拠プリントや薄型ドリルを用い、短時間で「根拠を意識した問題解決」を支える基礎となる知識・技能の定着を図る。
- ・工夫：児童の自己評価力を高めるために自己採点や相互採点を取り入れる。

V. 推進体制（チーム世羅の構築）

- ・研修の充実：「ミニ授業検討会」や「児童の実態に応じた支援」について研修を行い、教員の必要感に応じた研修を行い、日々の授業改善に生かす。
- ・安心感のある基盤：生徒指導部と連携し児童に対しても教職員に対しても、「ほめて、認めて、励ます」姿勢を貫き、失敗を恐れずに自分の言葉で語れる「安心感」のある組織を目指す。

VI. 検証の方法

- ・1月実施の標準学力調査算数科において全国平均+3P
- ・標準学力調査の記述式の問題の正答率が目標値を超える（全学年）
- ・学期末テストの点数が表裏の標準得点の合計を上回る児童の割合70%以上
- ・児童アンケートの肯定的評価「図や式、言葉などを使って、理由（根拠）を説明できた。」90%以上
- ・教師アンケートの肯定的評価「児童に算数用語を使ってまとめを書かせる授業が展開できた。」90%以上